

ヨハネによる福音書 19 章 38 節－42 節
「新しい墓」

《1》

主イエス・キリストは十字架において、息を引き取られました。これによって、旧約の二つの預言が成就しており、それによっても、主イエス・キリストこそ旧約以来の、約束された救い主であることが明らかになっています。

一つは「その骨は一つも砕かれない」という出エジプト記 12 章の御言葉、そしてもう一つは「彼らは自分たちの突き刺した者を見る」というゼカリヤ書からの御言葉でした。

今朝の個所は、そのイエスさまの遺体をアリマタヤのヨセフとニコデモの二人が中心になって埋葬したという出来事です。

弟子の筆頭格と言われたペトロをはじめとした十二弟子たちさえも逃げ去ってしまっている中、この二人の行為は、際立っています。

アリマタヤのヨセフのことは、四つの福音書が皆、埋葬における彼の働きを記しています。彼はユダヤ人を恐れて主の弟子であることを隠していた、とあります。しかし、事ここに到って、勇気を奮って、総督ピラトに遺体の取り降ろしを願い出た。

何とんでも国家的な犯罪人として処刑された人物ですから、願い出るにも勇気が要ったことでしょう。

彼はルカ福音書によると、善良な正しい人、とあります。イエスさまを葬ろうとしたというのは、まさにそのような善良で正しい、信仰深い彼にはふさわしい行いであったと言えます。

またニコデモがいました。「かつて、ある夜、イエスのもとに来たことのあるニコデモ」と言われています。3 章です。

その時イエスさまは彼に対して、「人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない」と言われました。これに対して彼は、「年を取った者が、どうして生まれることができますか」と、少し的外れな答えをしていました。

また、彼との問答が契機となって、イエスさまの有名な言葉が言われてもいます。——「神はその独り子をお与えになったほどに世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」

また、7 章 51 節では、イエスさまを捕らえようとしている、彼の仲間と言ってよいファリサイ派の者たち・サンヘドリンの議員たちに、このようなことを言って、彼らを諷めています。

「我々の律法によれば、まず本人から事情を聞き、何をしたかを確かめたうえでなければ、判決を下してはいけないことになっているではないか」。

なお、ニコデモについては、ヨハネ福音書だけが記しており、ほかの三つの福音書には、彼のことは出てきてはいません。(埋葬の個所以外にも、出てきていません)。

このヨセフも (ルカ 23 章 50 節) もニコデモも (ヨハネ 3 章 1 節)、最高法院の議員でした。ですから顔見知りであったことは当然でしょう。

しかし、恐らくそれ以上に、二人は気の合う友人だったのではないか。さらに、ニコデモが先ほど触れましたように、「本人から事情を聞かずに判決を下してはならない」と言ったように、ヨセフも「同僚の決議や行動には同意しなかった」とルカ福音書に記されています。——二人は政治的な立場も近い、よき同僚だったのではないのでしょうか。

それで、今回の埋葬に当たっても、二人で相談して、役割分担を決めて、事に当たっているようです。

ヨセフがピラトへの埋葬許可を取りに行きました。そして、ニコデモが没薬と沈香を混ぜた物を百リトラばかり持って来た。

没薬というのは、東方の三博士がイエスさまへの贈り物として持って来た三つのもの、黄金・乳香・没薬の一つとしてよく知られています。スミルネースという言葉ですが、英語でマー (myrrh)、ミルラとも訳されています。

香りのよい樹脂であり、止血、鎮痛、抗菌などに効果があるそうです。またこのミルラという言葉が元になってミイラという言葉ができていますが、それからも明らかなように、死体の防腐剤としてよく用いられるということです。

また、沈香というのはアロエのことですね。観賞用だけではなく、これは薬用にもなります。傷薬として、また胃を丈夫にする薬として、用いられるとされています。俗に「医者いらず」というそうです。

このような没薬と沈香を混ぜた物を百リトラ。1リトラは326グラムですから（聖書の後ろの度量衡）、32キロになります。子ども一人分くらいの重さです、相当な量です。これだけの香料を主の埋葬のために用意して、この香料を添えてイエスさまの遺体を亜麻布で包みました。

これによって、旧約の詩編の一節が実現されていると言ってよいでしょう。

詩編 45 編 8、9 節「神に従うことを愛し、逆らうことを憎むあなたに、神、あなたの神は油を注がれた。喜びの油を、あなたに結ばれた人々の前で。あなたの衣はすべて、ミルラ、アロエ、シナモンの香りを放ち」。

油を注がれる、ということは救い主として油を注がれるということです。ヘブル語のメシアとは油注がれた者ということであり、それをギリシア語に訳すとキリストになります。その救い主キリストは、今、墓にあって、ミルラ、アロエの香りを放っています。

《2》

その墓ですが、それは——主イエス・キリストが十字架につけられた所には園があって、そこにはまだ誰も葬られたことのない、新しい墓があって、そこにイエスさまは埋葬されたのだ、とあります。

その墓は、マタイ福音書によれば、他ならないアリマタヤのヨセフの持っていた墓でした。彼は恐らく、自分用に、その墓を確保していたものと思われます。

同じマタイ福音書によれば彼は金持ちであったとありますし、マルコ福音書では、身分の高い議員であった、とありますから、自分で自分の墓をもつだけの余裕があっ

たということでしょう。

新しい墓。まだ誰も使ったことのない墓です。墓として使われていない墓です。

イエスさまはご自身を、「父から聖なる者とされて世に遣わされた私」と言われています（10章36節）。

まさに、その聖なる御方にこそ、この新しい墓はふさわしいと言えるでしょう。そこには、通常死に伴うと思われるようなもの、連想されるようなもの、汚れて、腐敗したものは何もありません。

ヨセフという金持ちの墓に葬られたということにより、恐らくやがてヨセフ自身もその墓に葬られるつもりだったのでしょうから、ここで、イザヤ書53章9節の御言葉が実現している、と言えます。

苦難の僕である、救い主について、言われている中の一節です。「彼は不法を働かず、その口に偽りもなかったのに、その墓は神に逆らう者と共にされ、富める者と共に葬られた」。

ただしここで、「その墓は神に逆らう者と共にされ」ともあります。このまます実として読むと、まさに事実と違ってしまうわけですが、これは、イエスさまは十字架につけられることにより、不信仰な者たちからは、神に逆らう者と見做され、ほかの逆らう者たちと一緒に葬られようとしていたのだ、ということでしょう。

それは、もしヨセフが願い出なければ、イエスさまは他の犯罪人などと一緒に、共同墓地のようなところに葬られることになってしまったのでしょうから…。しかし、ヨセフの働きによって、そうはならなかったということですね。

このように、ヨセフとニコデモがイエスさまの埋葬のため、奔走したこと。そして、イエスさまのために新しい墓が用意されていたこと。

これらは、勿論、二人の信仰をそこに見るのですが、何よりも言えることは、神さまがそのようにすべてを導いておられる、ということですね。信仰は、そのような神さまのご計画、御旨の実現のために、神さまによって、尊く用いられるものです。

この主の葬りについては、使徒信条の中でも、「死んで葬られ」と告白されています。大切な条項の一つになっています。

なぜ、主は葬られたのか。ハイデルベルク信仰問答問41に比較的有名な解説・告白があります。

答え「それによって、この方が本当に死なれたということを、証しするためです」。

もし、イエスさまが本当は死んでない、ということになれば、私たち人間の罪は赦されないまま残ってしまいますね。復活などということも、ありえないことになるでしょう。一時的に意識を失っただけだということになってしまう。

私たちの救いそのものに直接関係してくることですから、ここで、本当に死んだのだと確認しているわけです。

もっとも、ハイデルベルク信仰問答の言葉が有名だと言いましたが、それよりも先にカルヴァンによって作られたジュネーヴ教会信仰問答の中で、カルヴァンが既に、

こう述べています。問 62 の途中から、――

「また主イエス・キリストの死が本当の死であったことを明らかにするために、彼は他の人々と同様に、墓に納められることを望まれた」。

葬りによって、本当に死んだということを明らかにしている。このことをカルヴァンが語っています。――このような考え方が、もともと、いつ、誰から来ているのかは正確には知りませんが、少なくともハイデルベルク信仰問答よりはカルヴァンのほうが早くから言っていることです。

《3》

では、新しい墓によって、何が決定的に、新しく起こっているのでしょうか？

それは、墓は終わりではない、ということです。信仰的に考えるのでなければ、死はすべての終わりでしょう。すると墓は、最後に行き着く所。人生の終わりです。

しかし、そのような墓は、主イエス・キリストが滅ぼし尽された。主にあって、墓は全く新しい。

それで、主にあって、救われて生きる者は、皆、新しくされています。死による滅びは過ぎ去って、新しい命に生かされる。

第 2 コリント 5 章 17 節「だからキリストと結ばれる人は誰でも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた」。

古いものは過ぎ去りました。主イエス・キリストと結ばれることにより、すべてが新しくされています。新しい創造の命に生きるのです。

ガラテヤ 6 章 15 節は、それがいかに大切なことかを、このように語ります。「割礼の有無は問題ではなく、大切なのは新しく創造されることです」。

また、テトス 3 章 5 節。ここに、私たちが新しくされることが、もう少し詳しく述べられています。「神は私たちが行った義の業によってではなく、ご自分の憐れみによって、私たちを救ってくださいました。この救いは、聖霊によって新しく生まれさせ、新たに造り変える洗いを通して実現したのです」。

このように、救われることは、新しく創造されること。――聖霊が私たちを新しく生まれ変わらせてくださいます。

新しい墓において、私たちのために死なれた主イエス・キリストが、私たちの死をすべてご自身の身に引き受けられて、私たちのために、葬られています。その死と葬りによって、私たちの死と葬りを、すべて御自身のものとしてくださっています。

それで、この主にあって、私たちはまた、死と葬りだけではなく、主の復活の命にも与るのです。

ローマ 6 章 8 節で、こう言われているとおりです。「私たちはキリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます」。

ですから私たちは、新しくされた救いを感謝し、いよいよ神さまを誉め称えましょう。

詩編の中には、「新しい歌を主に向かって歌え」と歌う詩が、いくつかあります。

例えば詩編 96 編 1 節には、「新しい歌を主に向かって歌え。全地よ、主に向かって歌え」。

また 98 編 1 節では、「新しい歌を主に向かって歌え。主は驚くべき御業を成し遂げられた」とあります。

昔、この言葉を聞いた時、誤って、これは新しい作詞、作曲の歌を歌え、という意味かと思いました。

そうではなく、救われた者として、新しくされた者として、その救いを感謝して歌え、ということですね。

主は新しい墓に葬られました。それによって、主に拠り頼む者すべてを、新しいものへと変えてくださいます。

この救いを、いつも喜び、感謝しましょう。新しい歌を、心からの感謝と祈りをもって、歌い続けていきましょう。

2021 年 6 月 13 日 朝拝

恵み深い天の父なる神さま、御名を崇めます。

主は死んで葬られました。その死と葬りは私たちの救いのためであり、私たちも主にあって、死んで葬られています。

その死と葬りは、まさに私たちの罪と滅びを、葬り去る死と葬りです。

信仰により、主にあって私たちはまったく新しく創造され、新しい命に生かされています。

絶えず、心から喜んで、新しい歌を主に向かって歌います。驚くべき御業を成し遂げられた主に感謝し、新しい歌を歌います。

主がどうか、そのような教会の歩みを、いよいよ御手の祝福のうちに支え、導いてくださいますように。

御手に委ねて、主イエス・キリストの御名によって祈ります。

大場康司